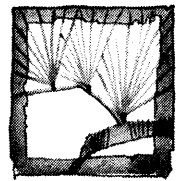


# 還曆から幼児を憶う

秋の彼岸の中日に還曆を迎えるちょうど一週間前、親しい西独の一哲学者から一通の手紙が届いた。彼との知り合いはもう古いが、この年の初夏再度の渡欧以来彼とある共同の仕事をしてほとんど完成に近づいていたころなので、何かそれに関係した事かと思いつながら封を切つて見たところ、思いがけなく私の還曆に寄せての祝文というよりは、むしろ私への希望をこめた忠言の真情を吐露した一文のように受け取られた。恥ずかしい事に私は彼の生年月日を正確に知らないが、七十歳近いことは確かである。従つて書簡の内容は「幼児の教育」ではなく「老人の教育」と言つて然るべきものであるが、両者は共通して人生の一齣である。幼児の教育に無縁ではないと思うので、この一文を紹介して世の母親さん方の参考の一つの材料にしていただくことができればと思う。

「六十年、それは美しくまとまつた数です。子供たちはもう相当に大きくなっています。そして、私たちには徐々に、全く



千谷七郎

徐々に何か孤独のようなものが強くなり始めています。仕合せな夫婦であれば、この孤独を分かち合います。多分自分だけは例外であつて、永遠に生きるであらうと思つていたような若者の夢はもうめつたに見ることはありません。百年前までは六十歳となれば年寄りだというのが通念でした。今日では老年は七十にならなければ、と考えられています。その事がどうのと言ふことはないので、その背後には老齡をいやがる気持ちといたつたものが潜んでいます。こういう嫌悪は人間だけがいただくものかもしれません。さて、こんな長い前置きをしましたが、やつとこれからが貴方に贈る私の祝辞です。

右のような嫌悪を、できるだけうまい折に忘れ去つていただくことができれば、と願うのです！ もし貴方が満足のうちに従容と年を取り、そしてこの尊ぶべき老年の贈物を享受されることに成功されればと願うものです。落ち着いた心に過ごし、勢力争いの喧騒から離れて、外見的な諸事を望まず、そして太古のものに与ることのできる老年の贈物です。太古のものと言

えば、日光や土の香、鳥の声や蝶の飛びかい、それに雲脚（雲の足）もあれば、また子供たちの微笑、若者の美しさや、若者の馬鹿騒（馬鹿騒ぎ）も昔からのものでしょう！

君、言うなかれ。そんな願いは早過ぎる、七十になつてからに願いたい、と。否、否、そうでない。このような願いはもう六十歳で始めなければならない。なぜなら、年を取る練習は早目に始めなければならないからです。そうでないと、これらの願いはついに達成される時がないからです。また、君、言うなかれ。私が何か大切な事を忘れていたのではないかと、私は決してそれを忘れたことはありません。「抗争者」(註、ルートヴィヒ・クラークスの千数百ページに及ぶ主著)の翻訳という君の大仕事を。どうして私がそれを忘れることがあるのか？ 私はこう思うのです。今述べた願いが達成されれば、君はこの大仕事を完成するだろう、と。

もう一言、附け加えさせていたきたい。幸福についての詩が一句思い出されました。それはゲーテの「イフィゲーニエ」の中で、苦難に耐えた人の口に上つた言葉ですが、貴方もゲーテを愛読されているので、この詩句で私の祝辞を結びたいと思うのです。第一幕第三場で巫女は王に莊重めいた口調で凱旋の祝辞を述べてあいさつする。王は巫女に次のように答える。

王者であろうと、庶民であろうと、最も幸福な者というのは、自分の家が仕合せにいつている者だ。

わがドイツ文学の中でも、人間の幸福をこれほど偉大に、これほど深く、これほど簡明に述べた言葉は他のどこにも見当たらないと思います。ここには陰陽の秘奥がこめられています。

……

ちょうどこの書簡が届いた折、もうかなり柔らかくなった秋の日差しを一杯に受けながら、書斎の縁側に届かんばかりに紫と白の萩の花が咲きこぼれている。その花から花に小蝶が舞っていた。蝶が下りると梢頭が揺れる。それとも、そよ風が揺らしたのか。澄んだ空気が縁側をつたわつて来る。外気に誘われて縁側にたたずんで見れば、遠くの空に夏の名残りの積雲が幾分乱れ勝に静かに動いている。東と西に遠く万里を距ててありながら、どうしてこうも気持ちを通じ合うものか、不思議な感じさえする。彼の言つて来ていることは気がついて見れば、もう自分の日常になつている。彼はそれにあつためて注意を向けてくれた。一日の長のゆえに、これを老年の贈物と言つてくれた彼の友情が心にしみ通る。

文字通りの坪庭で、石などという面倒なものはなく、職人など入れたこともなく、妻がその日その日に面倒を見てくれるだけなので、近ごろは落葉がたまって焼くな、みんな土になつてくれるんだから、などと言つたりする。一枚の落葉の下にも何億という微生物が生きて、そして地殻を支えていてくれ

るなどと思う。くもが巣を張っていても、できるだけくぐって通るような気になってしまふ。ここにも生命が息づいているし、それに害虫をかなり整理してくれるのだからなどと。

それが年というものかもしれないし、またそう言われるだろう。しかしこうしたひと時にこそ私は最高の心の安らぎを感じると同様に、思いは幼年のころに回る。なぜだろうか？ 私共に、それと意識しないのに回想を呼ぶのは、今とかつてとの間に根元的類似があるからに違いない。老が幼を呼ぶ！ くずれかかる積雲の頭や脊、そよぐ萩の梢頭が揺籃の気分を呼びさますのだろうか。間をおいて聞こえて来るこおろぎの聲が庭の砂場に遊んだ幼時の氣を呼び返すのか。

しかしあらためて幼時を回想しようとすると、はつきり具体的な形をとっているものがなんと少ないことか。それは今では謎のようにしか思われないある微光が漂っていたことである。山陰の城下町に生まれて幼稚園に一年通わせられた。熱心な、佛教信者の家庭に生まれながら、アメリカ人宣教師の幼稚園に通ったのだが、あまり自分の性に合わなかったか三分の一も出席しなかったように思う。当時の建物や先生方の顔は今でもはつきり思い出すことができるほど鮮明だけれど、その他には、お祈りの文句はついに覚えることなく、ただその時間が過ぎ去るのを口をもぐもぐしながら待ちわびたこと、壁に羽のついた

童子の絵がはってあったが、何か奇妙な感じがするだけで何の興もひかなかったこと、運動場の砂場、それに卒業式にはペソをかきながら無理やりに出席させられたことぐらいいし思い出せない。しかし、お寺の方は何か性に合うところがあったのか、毎年夏の終わるころ盆灯籠を建てに、夕暮れに兄弟子供だけで、歩いて十分とかからぬ墓にお参りするのが楽しかったような記憶がある。

はつきりした記憶と言えば奇妙な事に、奇妙な事が一つあるだけである。ある年、いざ出かけるとなつて、市松模様の浴衣でなければ、と駄々をこねて母親を手古ずらせたことである。母は何かの理由で、それはいけないというのをどうしても納得せず、とうとう押し入れから出させて着て行ったことである。どうしてその時私が市松模様の浴衣に愛着したかはわからない。翌年のお盆が来たときはもうねだらなかつたし、前の年の事を不思議な思いで回顧することができたぐらいであったことを覚えていいる。私の父は婿養子であったので初夏の甲の祭りのときはいつも父に連れられて四キロぐらい離れた海辺の村に歩いて行くのがならわしであった。親戚の人々の顔や祭のご馳走のことなどは、その後たびたび出かけたことであるから覚えていいるのは当然として、まだ物覚えの定かでないころのまた奇妙な記憶が一つある。四歳ぐらいのころかと思うが、日が沈みかかっ

て来て、父に連れられて川沿いの砂道を歩いて帰途についた。ふと見ると川べりの笹やぶの中に薄暗い影が見えた。私はそこを指さして、狐がいると言って父の手につかまった。父はそんなものは見えないという。いやいるといって、とうとう押し問答の末、父の肩車に乗ってそのところを数メートル通り過ぎてほっとして肩から降りたことがある。

四五歳ころまでの記憶を総ざらいしても、こんな他愛のないことしか、それも前後の脈絡もなく、全く断片的にしか思い出せない。それでも物心のついた時にはもう氷いでいたから、いつ覚えたのかはわからないが、ともかくも物心のつかない間に家の前を流れる川で氷いでいたであろうし、魚も抄すくい、野原に蝶やバッタを追っかけ、氏神さんの樹間を抜けながら蝶をさがしたことも確かである。捕えて来た蝶や蟬、魚などは、いつも後で放つて、殺さないようにさせられていたから。また、月に向かって走る黒雲と走り比べしようとかけ出したり、恐ろしい雷雨や暗がりで驚愕したり、夏空の壮観な入道雲に見とれたり、春風に袖をふくらませたり、雪解けの濁流に心はずませたり、あるいは子ども心に「良心」の疼いたきを感じたりしたこともあっただろう。しかし今ではすべて謎のようにしか思えない微光に包まれているだけである。この微光は、私共がそれを生き生きと見ることに夢になつていた幼年時代にはついに正体を見せ

ずじまいに終わつていたので。

今、老年の贈物に与ろうとするこの時、このような幼年時の微光が蘇生して来る思いがする。そしてこのような微光こそ、その時は夢中のままに過ごされるために気づかれないけれど、人生の地下水を流れる生命の泉であることが知れる。子は父になり、母になる。そしてやがて老年の尊い贈物を知るに至る。こんな長い目で幼児を見てほしい。このごろになつて両親や祖母、それに年寄つた親戚の人々が見せた優しいまなざしの笑顔が時折にまぶたに浮かぶ。それは今にして思えば、世の辛酸を経た、あるいは経ながらも、しっかりと生命の泉に浸ることのできた人々が幼児に寄せた思いやりの、成長の期待のこもつた微笑のまなざしであつたと思う。小利巧に育てないようにと、世の母親にお願ひしたい。

新年を迎える幼童の門出を祝して

日の春をさすがに鶴の歩みかな 其角

(東京女子医大)